［普及事項］

# 成果情報名：ハタネズミはダイファシノン粒剤をよく摂食する

**研究機関名**　果樹試験場　生産技術部
**担　当　者**　髙橋　功

［要約］

果樹園に生息する野そは３種類が確認され、９割以上がハタネズミである。捕獲したハタネズミに対し、現在、野そ対策として使用されているダイファシノン粒剤（商品名ヤソヂオン）を与えるとよく摂食し、20g程度の連続投与で90％以上が死亡する。

［キーワード］
ハタネズミ・ダイファシノン粒剤・ヤソヂオン・致死量

［普及対象範囲］
県内果樹産地全域

［ねらい］
果樹園の野そ被害は、積雪期間が長い県南部を中心に恒常化しており、捕獲や殺そ剤による密度低減を指導している。しかし、殺そ剤はそ穴への投入が主体で、摂食の有無が確認できないため、効果に疑念を抱く生産者も少なくない。そこで、1985年度から「秋田県農作物病害虫・雑草防除基準」に採用されているダイファシノン粒剤（以下、ヤソヂオン)のハタネズミに対する効果を検証する。

［成果の内容及び特徴］

１　野その食害が多い場内の圃場からは、ハタネズミ、ドブネズミ、アカネズミの３種が捕獲され、捕獲数はハタネズミが全体の96％を占める（図１）。

２　果樹園で捕獲したハタネズミは、果実とヤソヂオンを与えると、いずれもよく摂食する。

３　ハタネズミのヤソヂオンに対する感受性には個体差があるが、一回に4.5～9.2g（製剤で約50粒～100粒）を摂食すると、約50%が死亡する（図２）。

４　10日程度の間隔があいても、２～３回連続で合計11.9～18.3g（製剤で130～200粒）まで摂食すると、死亡率は90%以上になる（図２）。

［成果の活用上の留意点］

１　ヤソヂオンは整形の立方体で、１粒が約0.09gである。市販品には５ｇ（約55粒）入りの小袋の他に「果樹仕様」として10g入り（約110粒）小袋があり、試験結果から「果樹仕様」を利用した方が効率的である（図３）。

２　現在、数多く散在するそ穴に対し、小袋を一つずつ投入する方法が一般的であるが、標的とするそ穴を限定し、粒剤を投入後にリンゴ箱を被せる方法が省力的かつ効率的である（図４）。さらに、仕掛けた粒剤や果実などの摂食状況を観察し、粒剤の追加や果実などの交換、または設置場所を移動することで、無駄な処理をなくすことができる（図５）。

［具体的なデータ等］

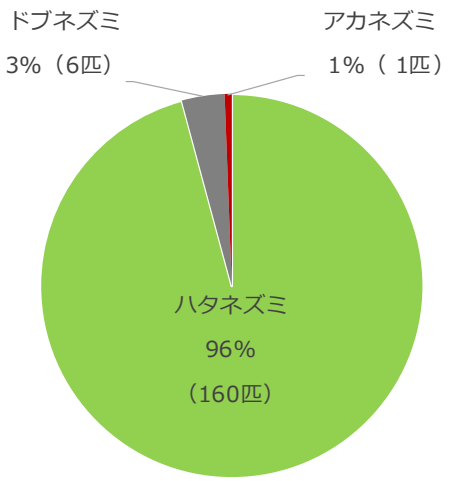



図１　果樹園で捕獲される野その種類

図３　ダイファシノン粒剤「ヤソヂオン」500g
左：一般品（5g小袋×100包入り）
右：果樹仕様（10g小袋×50包入り）

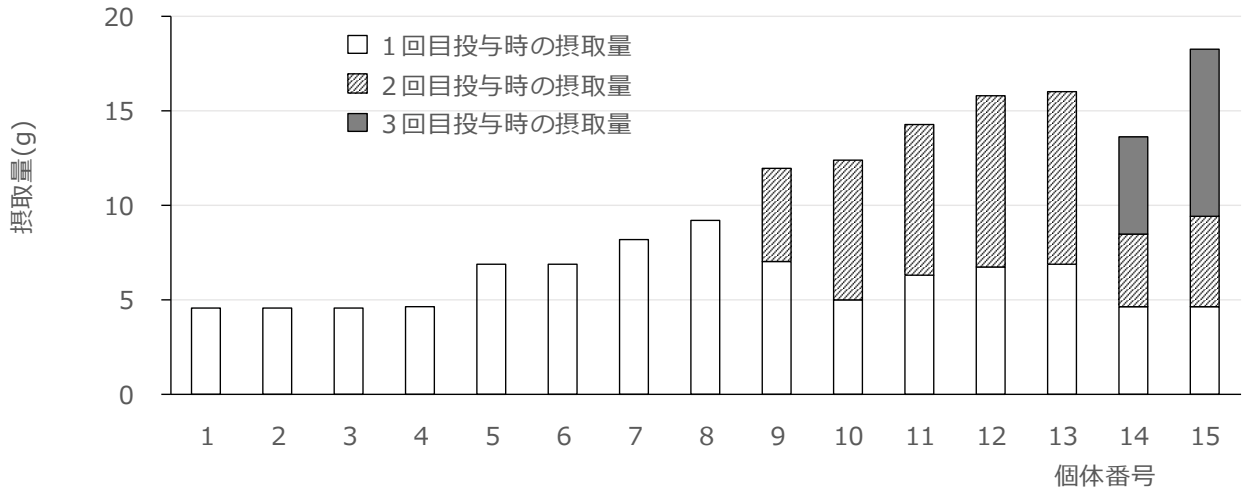
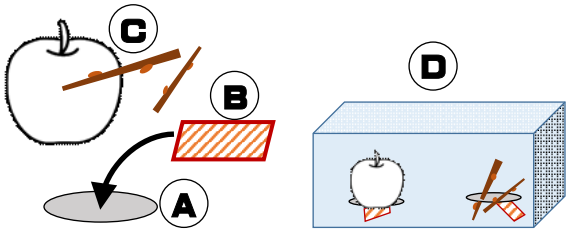



図２　ダイファシノン粒剤の投与で死亡したハタネズミの摂取量（16匹供試で、15匹死亡）




1．その穴（A）に粒剤（B）を浅く入れる。
※その穴上に置いても良い。
2．秋は落果など適当な果実、春は剪定枝（C）を準備。
3．粒剤を入れたその穴を果実でふさぐ。剪定枝の場合は、小袋が破れないよう注意して入れるか、穴の上に置く。
※無理に入れない。
4．その上をリンゴ箱（D）で覆う。

図４　ダイファシノン粒剤の設置例

図５　その穴上に被せたリンゴの摂食状況
※薬剤や果実の摂食がなくなるまで図４の対策を継続すると良い

［その他］

研究課題名：積雪地帯の果樹園におけるハタネズミの防除対策
研 究 期 間：平成30年度～令和元年度
予 算 区 分：その他
掲 載 誌 等：東北農業研究第74号(2021)